


蔦
王
2

目次

5	4	3	2	1	
二人の長兄	告白と約束	隣り合う世界	王妃アマリアス	コンラート	
147	126	60	22	7	
10	9	8	7	6	
帰ろう	伝え合う言葉	仮説と真実	吉報 <small>きつぽう</small> と心配事	癒 <small>い</small> される古傷と真意	
283	252	223	211	184	



ラウル (27歳)▶

コンラート王国四兄弟の末っ子で国王。アマリアスと食肉の研究が大好き。

アマリアス (25歳)▲

ヴィオラントの妹でコンラート王妃。董に“妹萌え”しているが健全女子。

▲アーヴェル (30歳)


四兄弟の長男。王位継承権は放棄済。乳牛の飼育と研究こそが生きがい。

ルータス (28歳)▲

四兄弟の三男。植物研究のかたわら趣味で垂直空間の研究をしている。

▲リヒト (29歳)

四兄弟の次男。服飾関係の会社を経営。兄弟一の美形だが……



**登場人物
紹介**



▲ヴィオラント (28歳)

大国グラディアトリアの元・皇帝。皇帝時代にすっかり表情を失ってしまったが……

ちびセバス▶

以前セバスチャンが董に分け与えた新芽。日々成長しているが、まだまだ甘えん坊。

のき すみれ
▲野崎 董 (16歳)

異世界に迷い込んだ女子高生。ドライな合理主義者だが、人間関係には不器用なところも。

◀セバスチャン

ヴィオラントの実験で突然変異し、今は彼の家の執事を務める動く藪。

1 コンラート

からからと、回る車輪のリズムは安定している。

石で舗装したわけでもない土がむき出しになった道だが、綺麗に均なざれているのか馬車の乗り心地はそう悪くない。

国境を越えてから、もう一時間ほど過ぎただろうか。

延々と続く一本道の両脇には、見事なまでに広大な牧草地帯が広がっている。

馬車の窓のへりに肘ひじをつけて、退屈そうにそれを眺める少女のどろんとした瞳は紫色。

ふわふわの黒髪は肩に付くか付かないかという長さで、柔らかく波打っている。

薔薇色のまるやかな頬、ちょこんとついた小さな愛らしい鼻。瑞々みずみずしい唇などは、思わず吸いつきたくなるほど。

この美少女は、名を「スマイレ」スミレという。

正確には野咲堇のさすみれという名の彼女は、自宅で火事に見舞われた上、その際に起こった爆発になす術すべもなく巻き込まれ、気がつけばこの異世界に飛ばされてしまったという、不思議な経験の持ち主である。

一面に萌える緑が生み出す澄んだ空気は心地よく、一定のリズムを奏でる馬車の振動は、彼女を微睡みに誘う子守唄のようだった。加えて――

「羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……」

馬車の窓から外を眺めていても出会えるのは、この一時間、牧草を食む羊ばかり。

「スマレ？ 眠いのならこちらにおいで」

ふわあと大欠伸を隠しもしない輩に、向かいの座席から手を差し出してきたのは、彼女と同じ紫の瞳をした男だ。

上質の絹糸のような白銀の髪に、完璧なシンメトリーを描く美貌。稀なる特性をあわせ持ったその麗姿は欠落した表情とあいまって畏怖さえ覚えるほど。

しかし、輩を映すその瞳は柔らかく、彼女の名を呼ぶ声もとにかく甘い。

元いた世界から弾き出されて、右も左も分からぬ輩を手厚く保護してくれたのが、彼――大國グラディアトリアの元・皇帝陛下、ヴィオラント・オル・レイスウェイクである。

輩をいたくお気に召したヴィオラントは、彼女を大貴族、シュタイアー公爵の養女にすえたかと思つと、あれよあれよと言う間に己の婚約者に仕立てあげた。

「羊を数えると眠くなるのが、日本人の習性なんだよね」

「なんとも、難儀な習性だな」

ヴィオラントに間違つた知識を植え付けつつ、輩が窓の外を見ればやはり、羊、羊、羊、羊……

「……あのさ、国境越えてから、羊しか見てないんだけど」

「そうか？」

現在二人は馬車に乗り、ヴィオラントと輩が住むグラディアトリアを出て隣国コンラート領を走っているところだ。

「コンラートは羊型人間の国なの？ それとも、私にだけ羊に見えるの？」

「いや、私にもあれは羊に見えるから心配ない。コンラート人も人種的にはグラディアトリア人と同じだ」

「じゃあ、人間どこ？ どこ行つたの人間？」

グラディアトリアでは、ヴィオラントが当主を務めるレイスウェイク家こそ住人は少なかったが、屋敷の敷地を一步出れば、そこは活気溢れる市街地。

家々や商店が街道沿いにびっしりと建ち並び、道路は碁盤の目のように整備され、そこには多くの人々が行き交っていた。

対して、隣国コンラートにおいては現在、国境から王城まで一本で続く主要道路を走っていると、いうのに、家どころか露店の一つも見当たらない。

それどころか周囲は家畜の餌となる牧草ばかりで、目を凝らせば遠くの方に民家らしきものが見えるものの、人の姿は全く見受けられない。

「なに、このギャップ……」

「国土の広さはグラディアトリアの十倍近いというのに、人口はほとんど変わらない。我が国の人口密度と比べれば、その差は凄まじいさ」

「国土が余りまくってるから、羊飼ってるの？」

「コンラートは優れた酪農と農業の国だ。グラディアアトリアも、良いものを多く輸入している」

「へ〜……」

小麦に始まり野菜や果物、香辛料に至るまで、コンラートで栽培されていない農作物はないと言われている。また、牛のミルクからは素朴な味わいのバターやチーズが作られ、その上独自の良質な食肉ブランドも持っているし、羊からは、きめ細かく軽くて柔らかいと評判の羊毛を得て暮らしている。

コンラート人は真面目で勤勉であり、暑すぎず寒すぎずの快適な気候がその努力に^{こた}応えて、多くの見返りを与えてくれる。農耕民族らしい穏やかな国民性のおかげで争い事も少なく、内政は安定し、国庫も潤っているという優良国家であった。

「一方、グラディアアトリアは加工技術に優れている。コンラートから原材料を輸入し、グラディアトリアで実用的に加工したものの一部を、またコンラートに輸出するという流通経路も確立されていて、持ちつ持たれつで友好的な関係が続いているのだ」

「ふ〜ん……」

グラディアアトリアとコンラートは、かなり親密な間柄のようだ。

そういえば、国境にも共同の警備隊の詰め所が置かれているだけで、越境の際の検閲はごく簡単なものだった。ヴィオラントにいたっては、ほぼ顔パスである。

何と言ってもグラディアアトリアからは、前皇帝ヴィオラントの妹であり、現皇帝ルドヴィークの

姉であるアマリアスが、コンラート国王のもとに嫁いでいる。

しかも聞くところによると、二人の婚姻は政略結婚などではなく、互いに初恋を交わした恋愛結婚だというのだから驚きた。

羊を数えるのに飽きた輩は、窓を開けて顔を出した。

「こら、スマレ。危ないぞ」

「馬車の中、飽きちゃった。サリバンさんとこ、行きたい」

「御者台に座る公爵令嬢など、どこにいる。それこそ、そなたの『にわか兄上』が嘆くぞ？」

それを聞いた輩は、自分の乗る馬車の後方を覗き込んだ。すると、後続の馬車の御者台にいた『兄上』のぎよつと見開かれた目とかち合い、すぐさま切羽詰まった顔で「首を引っ込める！」とジェスチャーで訴えられた。

今回、ヴィオラントと輩のコンラート訪問に付き添ったのは、レイスウエイク家の侍従長サリバンと女官長マーサ。加えて、輩を養女に迎えたシュタイアー公爵夫妻のたつての希望で、シュタイアー家の長男であり、騎士団第一隊長でもあるカーティスも同行している。

短く刈り込んだ母親譲りの栗色の髪とヘーゼルの瞳が彩るカーティスの端正な顔は、生真面目さが全面に表れており、その表情はだいたいいつも堅い。

初対面で見事に可愛い義妹に陥落させられた彼は、この度の同行について、年若い現皇帝からもよろしく頼むと直々に仰せつかったらしい。

ヴィオラントと輩が乗る馬車の御者はサリバンが務め、マーサと荷物を積んだ後方の馬車をカー

ティスが御している。

義妹を心配するあまり、いろいろと口うるさくなっているカーティスに、筋金入りの過保護だった実兄の姿を重ね合わせて、董はつい反抗的に頬をぶうつと膨らませてしまった。

とたん、彼が困ったように眉尻を下げたため、董は罪悪感を誤魔化すように顔を反対側に巡らせて、義兄の視線から逃れた。

すると、草原のずつと向こうから、羊よりも大振りの何かが駆けてくるのが目に入った。

「ヴィー、なんか来るよ？ ……あ、牛だ」

「牛か」

「あつ、人だ。牛に人が乗ってる。第一コンラート人発見」

「そうか」

「ややつ？ 牛使いの人が手を振ってるんだけど……」

董が窓から身を乗り出して「おい」と手を振り返すと、ヴィオラントは慌てて彼女の腰に手を回し、すかさずその不安定な身体を支えた。

「スマシ、危ない」

「うんうん」

ヴィオラントの軽い諷刺の言葉を聞き流しながら、董は彼の膝の上に座る。

高くなった視界に満足して窓の外を見ると、いつの間にか人を乗せた牛がこちらの馬車と並走していたものだから董は驚いた。

頭には二本の立派な角が生え、雄々しく逞しい黒毛に覆われた風貌は、董の知る闘牛用のそれによく似ていた。角と太い首に手綱を通し、背にはきちんと鞍が掛けられている。

それに乗っている人物はというと、真っ白いシャツの上に革のベストを着て、動きやすそうなズボンの裾はブーツイン。テンガロンハットをかぶればまんま西部劇っぽいな、と董が思う風貌であった。年齢的にはヴィオラントとそう変わらなさそうな青年で、赤味の強い金髪と淡い緑の目が印象的だった。

「やあやあやあ、閣下！ 久しぶり〜！」

「……ヴィー、お友達？」

「……友ではない、知り合いだ」

「うわっ……！ 相変わらず薄情だな〜」

牛乗りの男に気づいたらしいサリバング、徐々に馬車の速度を落として止めた。

すると、男の方も路肩に牛を止め、ひらりとその逞しい背中から飛び降りて、軽い足取りでこちらにやってくる。

「わーわー、話には聞いてたけど、ホントちゃんまくて可愛いねえ……」

馬車の窓から中にずっと半身を突っ込んで、ヴィオラントの膝にちよこんと座る董をまじまじと眺めると、男はにやにやと気安い調子で話しかけてくる。

「それにしても、漆黒の髪とは恐れ入ったね。そのうえ瞳の色が紫だなんて、こんな組み合わせの人間は僕も初めてお目にかかるよ」

そう言つて、葦の髪にさりげなく触れようとした手を、ヴィオラントがべしりと叩き落とした。
「気安く触るな」

「あー、はー、どーもすみません」

それの何が楽しいのか、男はさらにやにやと頬を緩める。

彼とそんなやり取りをするヴィオラントの雰囲気は、今までで一番くだけて見えた葦は、不思議そうにちよこんと首を傾げてから、もう一度同じ質問をした。

「……ヴィー、お友達？」

「そうだよ、お嬢さん！ 僕は友達、いや、親友さっ！」

明るい声を上げ、葦に食らいつかんばかりに身を乗り出した男に、ヴィオラントは「うるさい、黙れ」と冷たく言い放ちながらも、男のテンションの高さに疲れたようなため息を一つつき、膝に座らせた愛しい婚約者に彼を紹介した。

「これとは、幼い頃より交流がある。……こう見えても、コンラートの国王だ」

つまり、アマリーの旦那さんだね——と、葦は脳内変換して頷いた。

赤味の強い金色の短髪。楽しげな色を浮かべる瞳は、淡い緑色。

なるほど、王族らしくとても端正な顔立ちだが、明るく人懐っこい表情が彼を随分と親しみやすく見せている。友好的な雰囲気は、コンラート人の大らかな国民性の表れだろう。

突然のコンラート国王の出迎えに、後続の馬車の御者台にいたカーティスが驚いて、気遣わしげに様子をうかがいに飛んできたが、ヴィオラントに問題ないから待機するように命じられ、葦のこと

を気にしつつ後ろに戻っていった。

サリバンの方はさすがは年の功、こういった不測の事態にも実に落ち着いており、コンラート国王に恭しく挨拶をした後は、休憩のいい機会とばかりに馬に水を与え始めた。

——ラウル・ウエル・コンラート。

広大な酪農と農業の国コンラートの国王であり、現在二十七歳。

ヴィオラントの妹、アマリアスの夫である。

建国以来、グラディアトリアとコンラートは友好的な関係にあった。

王族同士の交流も盛んで、ラウルは幼少の頃、留学という名目でグラディアトリアの王城に滞在していたことがある。年の近いヴィオラントとラウルは、性格的には正反対であったが、かえってそのことが二人の距離を近づけた。

ただし、ヴィオラントは当時すでに皇太子として認知されていたが、ラウルの方は上に兄が三人もいたので、王になることはまずないだろうと思われていた。

だが、結局彼は三人の兄を差し置いて、王位に就いた。

「だって、兄上達つてば、揃いも揃って王位継がないって、駄々こねるんだもんさ」

「……」

ヴィオラントに説明を受けた葦は、彼らの気安い雰囲気は納得し、一番下のラウルが国王になった件に関して、とりあえず「各家庭いろいろ事情はあるよね」と頷いておいた。

一番上の兄は、乳牛の飼育と研究に力を入れ、より良質なミルクの確保と乳製品の開発、そして牛達の世話に忙しい。

二番目の兄は、上流階級の貴婦人のドレスのデザインを手がけるかたわら、田舎色の強いコンサート庶民の服飾技術向上事業にも勤しんでいる。

そして、三番目の兄の名をルータスという。

実は彼こそが、今回ヴィオラントと葦がコンラートを訪問した目的の相手であり、亜空間研究の第一人者である。二人は彼に、葦が元の世界に戻る方法について意見を求めるべく、コンラートへやってきたのだ。

ラウルの一つ年上でヴィオラントと同じ年の彼は、弟とともに幼少時代を隣国で過ごし、成人後は趣味が高じて植物研究に携わる学者となり、頻繁に出入りしていたグラディアトリアの研究所にそのまま所属した。そして何がきっかけになったのか、突然亜空間の研究を始め、今は自国で植物の品種改良や肥料の研究で国の農業に貢献しつつ、趣味である亜空間の研究を続けている。

「僕だって、他にやりたいことがあったんだよね。牛肉とか豚肉とか鶏肉とか羊肉とか……」

「肉ばっかじゃん」

「そうなの、僕ってば肉が大好きなんだよね！ だから、成人したら食肉の研究に人生懸けようと思つてたのさ。なのに、彼が——そう、君を猫みたいに膝に抱いている、その無表情の男だよ」

「ヴィー？」

コンラート王が恨めしげに顎で指すのは、膝に座らせた葦の髪を優しく撫でながら、反対の腕の

肘を窓枠について顎を載せ、無感動な目で彼を見返しているヴィオラントだ。

「そう。ヴィオラントがさあ、王位継がなきゃアマリアスを嫁に出来ないって言うんだよ？」

「それでも言わなければ、本当に王位を継ぐ者がいなかったのだから仕方あるまい。国主を選んで国の筋道を立てるのは、王族として生まれたお前達の責務だ」

「だったら、兄上達に言つてよね。僕ってば四男だよ？ 可愛い可愛い末っ子なんですけど！」

「上の兄達は性格的に王には向いていない。自分から継承権を放棄してくれて、私としては都合がよかった」

さらりと結構失礼なことを言つてのけたヴィオラントに、何故かしきりに頭をなでなでされながら、葦は向かい合う男達の顔を交互にうかがつた。

「……コンラートって独立国だよ？ よその国の人のヴィーにこんなに口出されて、いいの？」

「よくないっ——！ でも親友だし、アマリアスの兄上だから、まあまあ許すけど」

「私とて、隣国の事情にまでわずらわされるのはごめんだつたさ。だが、玉座が空だと必ずや国は乱れる。友好国の混乱は、少なからず我が国にも影響を及ぼすだろう」

「まあ、いい迷惑だよ」

「その通りだ。だから、兄弟の中で一番言うことを聞かせやすそうなラウルを推した。まあ、それなりに王としての責務も果たせるだろうと、一応の評価はしてのことだが」

「よかつたね。一応、ヴィーは褒めてくれてるみたいよ？」

「ううう……それなりに」とか「一応」とか、余計だと思っただけ……」

今から九年前。

大国の王として国を動かすより、それぞれの夢に固執したコンラートの王子達は、恐れ多くも王位の押し付け合いをした結果、隣国皇帝の介入により、末弟を王に祭り上げて落ち着いた。

一番玉座から遠かったはずの末の王子は、即位と同時に美しく気高い隣国の第一皇女を妻に迎えたことで箔が付き、以後大きな問題もなくコンラートを治めている。

ちなみに、先代のコンラート国王、つまりラウル達の父親は健在だ。

先代の国王はヴィオラントの助力で息子の一人を次の王に仕立て上げると、待つてましたとばかりに夫人とともに王都の隅っこに確保していた領地に引つ込み、酪農に明け暮れる第二の人生を謳歌しているらしい。

そもそも、幼いラウルを隣国に留学させて、わざわざ帝王学を学ばせたのは、この父王である。

そのことを思えば、彼は早くから次代の王の素質を少なからず末子に見出していたのかもしれない。「ところで、ヴィオラント。その、よその玉座にまで平気で口出しする遠慮なしの君が、婚約止まりつてのは一体全体どういうことなのさ？　なんでさっさと結婚しちゃわないの？」

「婚約の件は……、ああ、義母上がアマリアスに手紙を書いたと聞いたな」

「うちの奥さん、それ見て悲鳴上げてたよ。それで？　何か訳ありの婚約なのかい？」

「婚約に問題はないが、結婚には障害がある。それを取り除くために、ルータスの趣味が役立つかもしれない」

「えっ!?　ルータス兄ちゃんあの非生産的な研究が、一体何の役に立つていうのさ？」

「詳しい説明はまた後です。今はさっさと城に行つてこの子を休ませたい」

早朝、レイスウェイクの屋敷を出発し国境まで半日、コンラートに入ってから一時間ほど。

結構な長い時間を、乗り慣れない馬車に揺られていた輩はそれなりに疲れていたようで、ヴィオラントの膝の上で愛でられてる内に、猫のように丸まっとうとうとし始めていた。

その黒髪に愛おしげに口付け、さも大事そうに懐に抱え込むヴィオラントを、ラウルはポカンと口を開けたまま、間抜けな顔でまじまじと見つめた。

「……初めて見る君の姿に、どう反応したらいいか分かんないんだけど」

「お前の反応などに興味はない。それより、馬車に乗るのか牛に乗るのか、さっさと決める」

「えっ？　馬車に乗せてくれる気はあるの？　この、ベッタベタの愛の巣に？」

「お前が同乗しても、存在しないものとして扱うから、問題ない」

「……ものすごく、居心地が悪そうな気がするから、遠慮する」

目的のコンラートの王城まではもうすぐらしい。

ラウルが跨がってきた牛は、人間が立ち話をしている間は大人しく草を食んでいたが、移動する雰囲気を感じたのかぶると小振りな耳を震わせ、馬車の方に顔を向けた。その様子を眺めながら、ヴィオラントは呆れたように言った。

「そもそも、何故牛に乗ってくる」

コンラートには、馬の代わりに牛に乗るといふ特別な習慣があるわけではない。

通常は馬や馬車を使うし、このコンラート国王とて普段は馬に跨がっているのだ。

「いやあ、牛舎で君達に振るまう牛を選んでただけだね、僕自ら。ありがたいでしょ？ そしたらばちつと目が合つてさ。運命を感じたんでこの子に決めただけで、最後に一度くらい大草原を走らせてやるうかなって」

「……」

「冥土の土産つてやつ？ ついでに、君達を迎えにしようと思つてさ」

「……」

「ほら、解放感を味わった後って脳から何かいい物質が出て、細胞が活性化して肉質良くなってる気がしない？ 城に帰ったらすぐ料理してあげるからね！ 新鮮なのを召し上がれ」

得意げに胸を張るラウルを、ヴィオラントは相変わらず無感動に眺めていたが、腕の中で身じろぎした葦に気づいて、そちらに顔を向けた。

「……ヴィー」

「スマレ。眠つていても構わないぞ」

「私、今夜夕食にお肉出てきてもいらぬから……」

「何故っ!? こんなに僕が熱く語つてお勧めしてるつのに、どういうことよ？」

葦は、ぶーぶー文句を垂れるコンラート国王の背後に佇む牛と、しばし見つめ合つた。

食肉用に育てられた彼にとっては、到底着け慣れていないはずの手綱や鞍。そして大人の男を背中に乗せてここまで従順に走つてきたことを考えると、よほど大人しい性格らしい。闘牛のような

敵ついで見た目に似合わず。

逞しい身体のわりに小さく穏やかな瞳が、何もかも知っていながら運命を受け入れたかのように、静かに葦を見つめ返していた。

そんな彼を、この後食肉にして客人にふるまうと得意げにのたまうコンラート王。

葦はげんなりとしてため息をつき、ヴィオラントの胸に顔を埋めてつぶやいた。

「デリカシーのない人は、嫌い」

「同感だな」

頭上からは、同じくため息混じりの同意の聲が落ちてきた。

「スマレっ！ 会いたかったわっ!!」

再び走り出した馬車に揺られ、安定感のあるヴィオラントの膝でうとうととしていた輩は、突然息ができなくなつて苦悶のままに目を覚ました。

いつの間にか、目的地であるコンラートの王城の入り口に到着していたようだ。

目の前は、既視感を覚える柔らかな肉の谷間だった。

ぎゅうと背中に回る両腕の温かさにも、花のように芳しい香りにも覚えがある。

コンラート国王ラウルの妃であり、ヴィオラントの妹——アマリアス・フィア・コンラートだ。

輩が寝ぼけ眼のまま彼女を見上げると、それに気づいたアマリアスは満面の笑みを浮かべ、さらにぎゅうと抱きしめる腕に力を込めた。輩の鼻と口が、柔らかな肉でみっちりと塞がれた。

「落ち着きなさい、アマリアス。せっかく打ち解けたというのに、また同じ過ちを繰り返してどうする」

呆れた様子のヴィオラントに引き剥がされて、輩はなんとか窒息を免れた。

背後では、牛に跨がったままのコンラート王が「うわあ！ お嬢ちゃん、羨ましい!!」などと吠えているが、無視する。

「あらっ、ごめんなさい！ わたくしつたら、つい……だつてだつて、無事な姿を確かめることもできなかつたんですもの」

先日輩は、グラディアアトリアの王城から、ロートリアス公爵令嬢とその騎士に誘拐された。

レイスウェイク家の篤執事セバスチャンの眷属の活躍と、すぐに駆け付けたヴィオラントにより無事救出されたが、翌日帰国が迫っていたアマリアスは、輩の無事を知らされながらもその姿を見ることができないままだったのだ。

そのすぐ後、兄ヴィオラントから輩とともにコンラートに伺いたいとの手紙をもらった時には、すぐさま夫であるコンラート国王を額かせて、もちろん歓迎すると返事を出した。

さらにそれと前後するように、グラディアアトリアの母后である母エリザベスからは、ヴィオラントと輩に関する驚くべき知らせが届いた。

早く会って聞きたいことも言いたいことも、アマリアスには山のようにあったのだ。

「それにしても……ひどいですわっ、お兄様!! わたくしに一言の相談もなしに、わたくしの可愛い妹を養女に出すだなんてっ！ これではまるで騙し討ちですわっ!」

「いやいや、妹って……おかしなこと言ってるよ？ 奥さん」

「あなたは黙ってらして!」

「はっ、はいいっ……」

きいっと悔しそうに涙ぐむ妻に控え目に意見したものの、ぴしゃりと返されてびっくりとする夫の姿を見て、輩はコンラート国王夫婦の力関係を正しく理解した。

「それに、わたくしのいないところで婚約発表なさるなんて……！ お母様もミリアニスも、クロヴィスまで同席したというではありませんか!? ずるいですわ〜!!」

わあっと顔を覆ってアマリアスは泣き出す。彼女にベタ惚れのラウルは跨がっていた牛から飛び降り、駆け寄ってそっと抱き寄せたまではないものの、八つ当たりに鳩尾をドスドス打たれまくっていた。

ちなみに、ラウルが馬代わりに乗り回していた牛だが、結局夢見が悪そうという理由で今宵のデイナーになる運命は免れ、婚約祝いに生きたままヴィオラントと董にプレゼントされることとなった。

少し愛着が湧いた董に、「ロディちゃん」と名付けられた牛は、コンラート国王が背中から降りると、牛舎ではなく厩舎へと連れていかれた。

「ああもう、憎たらしいっつら。——カーティス!」

「——はい」

打たれまくっても何故か恍惚とした表情をしている、八つ当たりしがいのないラウルから、アマリアスは突然標的を変えた。

自分に断りもなく董を養女にしたのは、カーティスの父であるシュタイアー公爵だ。その息子にも、一言文句を言わなければ気が済まないらしい。

「わたくしのスマシレを奪うなんて、いい度胸ですわっ!!」

「その、申し訳ありません……」

真面目で堅物と有名なシュタイアー公爵家の長男は、理不尽とも言える元第一皇女の憤りに戸惑いながらも頭を下げた。

そんなカーティスの姿に何だかいたたまれなくなった董は、ヴィオラントの腕の中という最も安全な場所から、にわか兄を擁護する。

「カーティス兄様は悪くないよ、アマリー。黒幕はヴィーとダディだもん」

すると、それを聞いたカーティスは「妹よ!」と感動の眼差しで見つめてくる。その様子が、気まぐれに董が素直になった時に見る実兄の姿とかぶって懐かしくなる。

ヴィオラントは、ため息をついて董の頭の天辺に鼻先をぐりぐりと押しつけた。

対するアマリアスはというと、さらに悔しげに地団駄を踏んだ。

「兄様って……何ですのっ! ダディって、何者ですのっ!!」

「どうやら肝心ではないところが逆鱗に触れたらしい。」

「一応、私、シュタイアーさんちの末っ子になったから。ダディは公爵様だよ。本人がそう呼べて言った」

「きいっ! もう許せませんわ、シュタイアー家! わたくしがスマシレに「お姉様」と呼ばせるつもりだったのっ!」

あまりの悔しさに、再び無抵抗なラウルに八つ当たりを始めたアマリアスだったが、そんな彼女の言葉に董はちょこんと首を傾げて問うた。

「アマリーは、お姉さんじゃなくて、妹でしょ?」

「……え？」

「だってもしもヴィーと結婚したら、私、アマリーの義理の姉になるんでしょ？」

「……まあ……」

それを聞いたとたん、怒り狂って般若の形相だったコンラート王妃の顔が、ぱああっと明るく輝き、女神のような微笑みが現れた。

「まあ、まあ、そうですね。スミレはわたくしの“お姉様”になるのですわ」

新たな萌えを発見したらしいアマリアスは、素敵……とつぶやいてうっとりとした。

王妃の機嫌も好転したところで、一行は事の成り行きを見守っていたコンラート王家の侍従長に案内され、ようやく王城の中に足を踏み入れた。

ヴィオラントと葦の後ろにサリバンとカーティス、そして小さな鉢植えを抱えたマーサが続いた。その鉢植えには、先日葦の髪飾り兼護衛としてシュタイア家の夜会にくっついてきた、鶯執事セバスチャンの新芽が植えられている。

少し成長して蔓が伸び、小さな鉢と土の根城をいただいた彼は、葦によって“ちびセバス”と命名された。シュタイア家の葦の私室に置かれることになったちびセバスだが、主人と認めた葦の側にいたがるあまり、今回のコンラート行きもほとんど泣き落としの勢いで彼女にかけ合って同行することになったのだ。

葦の方も、新芽から育っていく姿を見ていたせいにか、それなりに愛着があるらしく、比較的彼に

は甘い。

しかし、それに調子に乗ったちびセバスがあまりに葦にベッタリしすぎたため、ヴィオラントの不興を買ってしまった、彼女と同じ馬車には乗せてもらえなかったのだ。

マーサがちびセバスを抱えて葦に近づくと、彼は尻尾を振って飼い主に飛びつく犬のように彼女に向かって蔓を伸ばす。ようやく鉢ごと愛しい腕の中に収まった彼はご満悦の様子だ。

郊外の風景こそ、グラディアトリアとはかけ離れたコンラートだったが、王城に近づくにつれて街道には建物が増え始め、やがて見えてきた城下街の賑わいは隣国のそれとほとんど変わらなかった。王城内の造りもよく似ていて、潤った国庫を抱えるわりに質素な部分があるところまで共通している。

グラディアトリアもコンラートも、王族がその栄華に溺れず慎ましく過ごしているからこそ、これほどまでに安定した平和と繁栄を保っているのだろう。

ぞろぞろと回廊を移動する国王と賓客に、恭しく頭を下げて道を譲る侍女や侍従達の服装も、葦がグラディアトリアの王城で見たそれとよく似たものだった。

和やかな歓迎ムードの中を移動して応接室に通されると、すでにお茶の用意が整っており、側には数人の侍女が控えていた。

その中に、先日グラディアトリアのアマリアスの私室で世話になった侍女達を見つけ、葦は思わず顔を綻ばせる。すると彼女達も嬉しそうな微笑みを返してくれた。

葦が日当たりのいい窓辺にちびセバスの鉢植えを置き、テーブルの水差しからコップに水を汲ぐ

で与えると、彼は嬉しそうに葉を震わせて茎をぴんと伸ばした。

一方、マーサはコンラートの侍従長と侍女に主人達を任せて、応接室とは別に用意されている客室に向かう。

もちろんコンラート側がきちんと部屋を整えてくれているのだが、持ってきた主人達の衣装や何やらは、やはり自らの手できちんと整理すべしというのが、レイスウェイク家の女官長たるものプライドだった。

「ルータス兄上には、使いを出しておいたよ」

先ほど、ヴィオラントが用があると云っていたことを憶えていたラウルは、すぐ上の兄ルータス・ウエル・コンラートを呼び寄せようと、侍従長に使いの指示を出していた。

ルータスはヴィオラントと同じ年で、植物研究という共通の趣味をもった彼とは、かつて同じ人物に師事していたこともある。今は亡きその師はコンラート出身で国内に領地を持っており、ルータスはその領地を譲り受けて屋敷を構えているのだという。

コンラートでも、王族であろうと成人男子は仕事を持たねばならない。

いったんは、グラディアトリアで研究者として地位を確立したルータスだったが、いつの頃からか日常生活が趣味の研究の方に偏り始め、二年前——ヴィオラントの退位を機に、故郷であるコンラートに戻ってきていた。

元々亜空間という概念を理解せず、性格的に合わなかった宰相クロヴィスとの関係が悪化し、居心地が悪くなったというのも、彼がグラディアトリアを出た一つの要因であろう。

コンラートでは、王位継承権を放棄した第三王子が非現実的に見える研究に没頭しようと、否定したり邪魔をしたりする者はいない。もちろん期待もしていないのだが……。おおらかなコンラート人は、他人の趣味にとやかく口を挟んだりしないのだ。

おかげでルータスは、請け負った仕事以外の時間は、思う存分自分の好きなことに没頭できているらしい。

「けど、ルータス兄上はあの通りだから、気が向かないとなかなか……」

「かまわない。今日来なければ、明日にでもこちらから屋敷を訪ねる」

そんなルータスのマイペースな性格は、弟のラウルはもちろんのこと、古い付き合いであるヴィオラントも承知の上であった。

「ところで、アマリアス。昼食はちゃんと食べたのかな？」

菫の紅茶にたっぷりミルクを注ぎ、甲斐甲斐しく世話を焼く妻に向かって、コンラート国王が口を開いた。

「……食べましたわよ」

わずかな沈黙の後、わざと目を逸らして答えたアマリアスを不審そうに見たラウルは、壁際に控える彼女の侍女達に視線で問うた。

すると、彼女達は困ったように顔を伏せる。

「一度、医者に診せよう」

「……少し、食欲がないだけですわ。どこも悪くありません」

まだ出会って間もないものの、葦から見ても今までで一番真剣な顔をしたラウルの言葉に、アマリアスは拗ねた少女のようにつんと口を尖らせた。

「どうしたの？ アマリリー、ご飯食べられないの？」

心配になった葦が、豪華な金髪に縁取られた王妃の顔を覗き込むと、彼女は「大丈夫ですわ」と微笑んでみせる。だが、確かに言われてみれば、あまり顔色が優れないように見える。

「大丈夫じゃないよ、アマリアス。もう三日もろくに食べてないだろう？」

「……少しは、食べてますわ。小食だけです」

「いや。最初は、ヴィオラントとお嬢ちゃんとの婚約にショックを受けたからだと思ってたけど、それだけじゃない。とにかく、今から侍医を呼ぶからね」

「嫌ですわ。お医者様は、嫌いです」

「アマリアス！」

——なんだなんだ、どうした？ と、突然の展開に目を丸くしている葦の隣で、紅茶のカップをソーサーに戻したヴィオラントが口を開いた。

「きちんと診てもらいなさい、アマリアス」

「お兄様、でも……」

「己の健康管理も王族の責任の一つだ。体調を崩せば政務は滞り、周囲に余計な仕事を増やすことになる。一国の王妃たる自覚を持ちなさい」

「……はい、申し訳ありません」

厳しいが正論を述べるヴィオラントに、アマリアスはしゅんとして俯く。葦は彼女が何だか可哀想になって、膝の上に置かれた彼女の白い手をぼんぼんと叩いて言った。

「アマリー、お医者様が嫌いななの？」

「……ええ、嫌いなんですの。それに……怖いんですの」

子供のように医者が嫌いだの怖いだのと言うアマリアスの顔は、ただ我が儘を言っているだけのようには見えない。膝の上に揃えられた彼女の両手は、かすかに震えていた。

「じゃあ、一緒にいるよ、アマリー」

「え……？」

「私も、お医者さんは苦手。なんか、かまえちゃうよね」

両親と疎遠だった幼少時代、葦が体調を崩せば病院に連れていくのはいつも兄だった。

成長するにつれて、教師として毎日忙しく過ごす兄をわずらわせたくなくて、葦は少しずつの体調不良は我慢してやり過ごし、どうにもならない時は一人でさっさと病院に行くようになった。

だけど、一人待合室で名前を呼ばれるのを待つのも、一人診察室で医者と向かい合うのも、本当は寂しくて怖くて大嫌いだっただけ。

後々、保険の通知や処方薬が見つかるのだが、その度に兄には何故知らせなかったのかと嘆かれた。今思えば、はじめから素直に甘えて、兄と一緒に行ってもらえばよかった。

アマリアスが医者嫌がる理由はよく分からないが、怖いと言う彼女の側に寄り添うことならで

きる。

力いっぱい抱きしめてくれる彼女を抱きしめ返すことなら、葦にもできる。だから、不安定に揺れる青い瞳を見つめて、葦はにこりと微笑んだ。

「一緒にいて、お医者さんがアマリーの嫌なことをしそうになったら、私が止めてあげる」
「スマレ……」

「お姉ちゃんに任せなさい」

葦が慎ましい胸を張ってそう言うと、アマリアスはくしゃりと泣きそうな顔で微笑んだ。そうして、アマリアスは葦の付き添いのもと、何とか診察を受けることを了承した。

それを聞いたラウルはほっとため息をつき、妻を説得してくれた少女に向かって感謝した。

「ありがとう、お嬢ちゃん。助かったよ。お礼にぜひ新鮮な牛肉を——」

「いいないし」

侍医は王城内に常駐しているため、すぐに診察の準備が整った。

診察は王妃の私室で行うというので、付き添うと約束した葦も、アマリアスや彼女の侍女達とともにそちらに移動することになった。

診察では当然衣服を脱ぐ必要があるので、夫や兄といえども異性が立ち会うことはない。

しかし、せめて診察中は扉の外で待機するから部屋まで一緒に行くと言った愛妻家のラウルを、アマリアスは何故か激しく拒む。そのため仕方なく男性陣はそのまま応接室に留まることになった。

コンラート王家の侍医は、レイスウエイク家の女官長と年代の女医だった。

いかにも穏やかで優しいような女性だというのに、診察を控えたアマリアスの顔色は優れない。葦は、ソファに腰を下ろしたアマリアスにびたりとくつき、かすかに震える彼女の手を握ってあげた。

この世界の人間の容貌は、東洋人の葦とは違い、西洋人と似通った特徴をしている。

ヴィオラント達男性陣はもちろんであるが、女性のアマリアスも葦に比べるとかなり上背がある。

乳房は豊満で尻は円やかなのに、腰や手足は驚くほど細くて長い。コンラート王妃アマリアスは、完璧なプロポーシヨンと自信に満ちあふれた、華やかで美しい大人の女性だ。

しかし、今は何かに怯えるように小さな少女に縋り、頬に睫毛の影を物憂げに落としている。

「アマリー……?」

「……わたくし、こわいのです。期待するのでも、その後がっかりするのでも、もう嫌ですの」

女医は診察に同席したコンラート王家の女官長に、王妃の最近の健康状態について尋ね、その後では、月のものはどうなっておられますか?と問うた。

それを聞いたアマリアスの手が、一瞬ピクリと跳ね上がった。

コンラート国王ラウルのもとに、隣国グラディアトリアの第一皇女が嫁いだのは、もう九年も前のことだった。

かねてから彼らの恋仲は有名だったので、周囲はすぐにでもお世継ぎを拝めると期待した。二人の寝所を邪魔する者などいるはずもなく、その願いはすぐに叶うものだ、誰もが思っていた。

しかし、いまだコンラート国王夫妻の間に子供はいない。

「何度も、期待しましたの。月のものが少しでも遅れる度に、今度こそは……」
「うん……」

「でも、いつもいつも落胆に終わった。……また、あの人がすっかりさせるのが、とても怖いのです」
コンラートは、厳密な世襲制ではないので、王と王妃の間に子ができなければ、王位は王家の血筋を辿って然るべき人物に受け継がれることになる。

しかしできることなら、王家の血が一番濃い者に玉座を継がせたいというのが、人々の本音だろう。なかなか子供を授からない理由は様々であり、男女どちらにも原因があり得る。

しかし多くの場合は、女性の方がより重圧に苦しむ。それはどこの世界でも同じのようだ。

「王妃様、失礼いたします」

侍医は恭しくアマリアスの手首を取り、脈を測りつつ呼吸数を確認している。

その頃には、アマリアスの様子も落ち着いていた。

いや、この診察のいかなる結果にも期待せず、何にも傷つけられぬように心を閉ざしていたのかもしれない。王妃としてのプライドだけが彼女の美しさを毅然としたものにして見えて、董はいたたまれなくなった。

妻がこんなに悩んでいることを、はたしてあのコンラート国王は知っているのだろうか。

(いいや、あのデリカシーのなさからして、気づいてすらいんじゃないじゃ……)

そう思うと、何だか無性にむかむかしてきた董は、あとでラウルの向こう脛を思いっきり蹴つてやろう、と心に決めた。

「おめでどうございます、王妃様。ご懐妊です」

「え……」

診察がもたらした結果は、アマリアスにとって思いがけないものだったらしい。

彼女は隣に座った董にくっついたまま、侍医の言葉に耳を塞ごうとさえていたのだから。

両腕を回してアマリアスを支えていた董も、年嵩の女医の言葉が一瞬理解できなくて、きよんとした。

「すでに、三月ほど経っておられるようです。月のものが遅れていらっしやったというのに、私に報告が上がってこなかったのはどういうことでしょうか？」

侍医はそう言って、王妃の側に佇むコンラート王家の女官長を厳しい目で見つめた。

女官長は少し困ったような顔をして、それでも侍医に向かって申し訳ございませんと頭を下げた。

「……違うのよ。女官長に口止めたのは、わたくしです。女官長はわたくしの我が侷を聞いてくれただけ、彼女は悪くないの……」

「王妃様」

呆然としていたアマリアスが、いつもの彼女らしからぬ弱々しい声で口を開いた。

月のものが遅れる度に「すわ妊娠か!？」と周囲は浮き足立って侍医を呼び、診察の結果が期待通りでなければ落胆する。それを、アマリアスは九年もの間味わってきた。

常に王妃の側に寄り添う女官長が、同じ女性として彼女の心の痛みに気づかぬはずがない。

それゆえ最近は、少々王妃の月のものが遅れようとも、体調に著しい変化がない限り侍医には報告していなかったのだ。

「ねえ……本当に？ 本当に、わたくしのお腹に赤子がいるの……？」

期待しては落胆し、傷つくのに疲れて半ば子供を諦めかけていたらしいアマリアスは、侍医の言葉が幻聴や夢ではないかと、不安で仕方がないのだろう。董の手を握りしめる彼女の両手は、かすかに汗ばみ、震えていた。

「はい。間違いございません、王妃様はご懐妊されておられます。食欲がないのはつわりのせいでしよう。どうぞ、御身をご自愛くださいませ」

侍医も女性である。

なかなか世継ぎを授からぬことに心を痛めていた王妃の気持ちに、すぐ気づいたのだろう。

侍医はアマリアスの不安を取り除くように、その穏やかな顔に柔らかな笑みを載せて、きつぱりと懐妊の事実を告げた。

「やたっ！ おめでとう、アマリー！」

「……スミレ、わたくし……本当に？」

「疑り深いなあ、アマリーは。お医者さんがそう言ってるんだから、そうなんだよ」

いまだ呆然としているアマリアスを、董は何度も彼女にされたようにぎゅっと抱き締めた。

もちろん、赤子がいるという彼女のお腹に負担をかけないように気を遣って。

「だって……まだ、信じられない……」

「信じられなくても、いるってんだからいるの！ だから、大事にしなくちゃなんだよ？」

「お嬢様のおっしゃるとおりです、王妃様。まずは安定期に入るまで、油断はなりませんよ。もちろん、夜の生活は国王陛下にはご遠慮いただき——ああ！ こうしてはいられない！ 誰か陛下にご報告を……！」

アマリアスは、大事そうに自分の腹を撫でる董を見下ろし、いつもは慎ましい女官長がはしゃぐ様子を眺め、ようやくくじわじわと喜びが湧き上がってくるのを感じた。

——それからは、もう大騒ぎだった。

王妃懐妊の吉報を携えた女官や侍女達が、ばたばたと城中を駆けずり回った。

その夜、当初予定していた、グラディアトリアからの客人を歓迎するための晩餐は、急遽盛大な王妃懐妊祝いパーティに変更になった。

「よおーしっ、飲むぞーっ！ 皆もどんどん飲んで、どんどん食べろっ!!」

この夜、普段は夜会や舞踏会が開かれるコンラート城の大広間には、一面にテーブルが並べられ、その上にはところ狭しと様々な食べ物や飲み物が溢れかえっていた。

コンラート国王ラウルは、王妃懐妊の喜びを皆で分かち合いたいと、城中の者を晩餐に招待した。もちろん、厨房係は料理を作らなければならないし、給仕係も配膳をしなければならないので、全員が全員ご相伴にあずかれたわけではないが、それでも多くの人々が国王夫妻に祝いの言葉を伝えようと集まってきた。

突然の催しであるから、普段の夜会に出されるような高級食材はそれほど多く用意できておらず、ディナーの内容は一般的な家庭料理が大半だったが、王族・貴族を含めおらかなコンラートの人々は大満足だった。

そして、今宵の一番の目玉は、地下貯蔵庫からコンラート国王自ら担ぎ出してきた、年代物の樽詰めワインだ。ラウルはそれを、気前良く人々に振るまつた。

「どんどんいけ〜！ 今夜は無礼講だっ!!」

彼はもうだいたいぶ出来上がっていて、王妃にデレデレとしなだれかかつては「重いですわ!」と叱られている。それさえも嬉しいのか、彼の顔からは幸せいっぱいの笑みが溢れ出していた。

しかし、そんな浮かれたコンラート国王にびしゃりと冷水をかけるように、斜め上から冷たい声
が降ってきた。

「無礼講上等。じゃあ、遠慮なく蹴るからね」

「ん〜？ わ〜、お嬢ちゃん!」

ラウルが顔を上げると、今日初めて出会った隣国からの客人が目の前で彼を見下ろしていた。妻アマリアスが溺愛するクリスティーナ人形にそっくりの美少女は、パーティ用にさらに美しく飾り立てられている。

ふわふわの黒髪は、色とりどりの花を飾って華やかに。プリンセスラインのワンピースドレスはふんわりとされていて、精緻に施された刺繍とレース、柔らかそうなフリルが愛らしい。

「ほんと、お人形さんみたいに可愛いねえ……ていうか、何かな？ その振り上げた足は」

ところがラウルの言う通り、紫の瞳で彼を冷たく見下ろす少女の小さな足が、何故か不自然に持ち上がっているではないか。

「だから、蹴るよって言ってるじゃん。おとなしく向こう脛を晒しなよ」

椅子に座って隣のアマリアスにくっついたまま、ラウルがきよんとんととして少女の足と顔を見比べていると、いっそう冷ややかな二度目の宣言通り、小さな踵が彼の向こう脛めがけて降ってきた。

「えええ〜っ!? ——いだっつ……!!」

向こう脛とは、いわゆる弁慶の泣きどころだ。

あのいかついビジュアルの武人が泣いちゃうくらいだから、相当痛いはずだ。

今でこそ、城内も人々も王妃の懐妊に浮かれています、その前に診察に立ち会った輩は、ずっと不妊に悩んでいたアマリアスを知り、それをフォローできていなかったラウルの不甲斐なさに怒りを覚えていた。

有言実行を掲げる輩は、思いっきり足を振り落としてすつきりした。

踵の尖ったヒールではなく、柔らかなべたんこ靴の踵落として勘弁してやった自分は寛容だな、と満足そうに頷く。

その背後では、彼女の婚約者が冷めた目で、向こう脛を押さえて悶える旧友を見下ろしていた。

「まあ、スマレっ！ なんて可愛らしいのかしらっ!」

涙目の夫を気にかけることもなく、王妃アマリアスは側にやってきた輩の姿に瞳を輝かせ、母のような優しい仕草で少女の柔らかな頬を撫でた。

「アマリー、大丈夫？　こんなお祭り騒ぎにつわりの奥さん引つ張り出して、何考えてんだか、このバカキング」

「ばかきんぐ……」

「もう一回蹴ろうか？　違う方の向こう脛を」

「まあ」

再度ラウルに向かって足を振り上げた重だったが、満面の笑みを浮かべたアマリアスが抱きしめて止めた。

「アマリー？」

「ありがとう、スマレ。わたくしのために怒ってくださったのね」

「だって、無神経なものもデリカシーがないのも、時と場合によっちゃあ重罪だもん」

「そうですわねえ。ラウルは本当にデリカシーの足りない『バカキング』ですけど、いつも一生懸命で憎めないんですよ？」

「ふうん……」

腹に子を宿したアマリアスは、前のように重を抱きつぶすことはなくなった。

その代わり、労るように背中を撫でてくれる少女の小さな手に幸せを感じながら、腕に囲った彼女とそつと囁き合った。

「ラウルにはね、世継ぎがまだかなんて一度も言われたことないんですよ。でも、子供は好きだと知っていたから、どうしても彼の御子を産んであげたかった……私の悩みは、私の我が侬だったん

ですわ」

「でも、アマリーの悩みに気づかないなんて鈍すぎるし。周りの余計なおしゃべりも、王様なら抑えなきゃ」

「楽観的な性格ですから……周りがどれほど真剣に私達の間生まれる世継ぎを求めているか、理解できていなかったんですわ。おバカさんですわねえ。うふふふ」

「うふふふ……『脳天に踵落とし』に変更だ」

標はまだ向こう脛を抱えて床に蹲っていたので、小柄な重でもその赤味の強い金髪の天辺は充分狙えそうだった。

「まあ、堪忍ですわ」と言いつつ、本気で止める気はないらしいアマリアスを背中に貼りつけて、やつぱりがつつりハイヒールを履いてくればよかったと思いつつ足を持ち上げると、重は思わぬ相手に阻止された。

「スマレ、やめなさい」

それまで背後で沈黙していたヴィオラントが、重の踵が高く上がる前に足首を掴んで押さえ、それによりバランスが崩れて転びそうになった彼女を素早く抱き上げた。

「なにさ、ヴィー。アマリーを泣かせたバカキングを庇うの!？」

「そんなものを庇うつもりはない。それよりも、人前で足を振り上げてはいけない。そなたはスカートではないか」

「平気だよ。下に穿いている」

そう言つて、レイスウェイク家の女官長マーサに着せてもらった、ふんわり膝丈ドレスの裾を捲り上げ、下に着込んだペチコートを示そうとすると、ものすごい早さで裾を奪われ引き下げられた。「スミレ、いけない。——私に、この場にいる全員の間をくり抜かせる気か？」

「それは、骨が折れそうだね」

無表情で空恐ろしいことを言いつつ少女のスカートを押さえるヴィオラントと、彼に子供のよう
に抱かれたままのんきに答える菫に、向こう脛の痛みのようやく収まつてきたラウルはぎよつと
した。

「あ、あのお。何だか分からないけど、土下座でも何でもするからさ。物騒な会話はやめてく
れないかな……」

ラウルが遠慮がちに意見すると、その声に反応して、ぐるんと頭を巡らせた少女の視線が彼を捉
えた。

コンラート国王は、思わず姿勢を正す。

十以上も年下の、愛玩人形のように愛らしい少女だが、その視線には権力者に対する媚びもへつ
らいも、もちろん敬いの欠片もなく、ラウルはただの一個人として見据えられているのを感じた。

彼女に心酔する忠実な従僕のごとく侍るのは、大国グレイアトリアにかつて肅清の嵐を巻き起
こしつつも大改革を成し遂げ、大陸中にその名を轟かせた、稀代の皇帝ヴィオラント。ラウルは彼
と、幼い時をともに過ごした思い出がある。

年齢も雰囲気も違う、菫とヴィオラント。

何とも不思議な組み合わせのこの二人が、一体どのようにしてこれほどまでに親愛を深めたのか。
ラウルは詳しいことはまだ聞いていなかったが、すでに彼らはグレイアトリアの上流社会に婚
約を認めさせたいらしい。

隣接する国の王の立場としては、退位してもなお凄まじい影響力とカリスマ性を持つヴィオラン
トの婚姻は、決して無視できないことである。実際コンラートの貴族の中には、以前より自国の娘
を彼に嫁がせて隣国との絆を深めようと、進言する者も少なくはなかった。

しかし、ヴィオラントと古い付き合いのラウルには、彼がそれをひどく嫌うことも容易に想像で
きたし、何より友として、ようやく皇帝の重臣から解放されたヴィオラントに、権力の蔓が巻き付
いた女など宛てがいたくなかった。

同じような思考で今まで兄の周りをうろつく女に対して敵しかったアマリアスも、この不思議な
黒髪の少女にだけは彼の側にいることを許している。

彼女の容姿が愛するクリステイナ——黒髪と青い瞳をした愛玩人形に、よく似ているというの
もひとつの理由だろうが、少女を見つめる兄の瞳が今まで見たこともないほど愛情に満ちているの
を見ているからでもあるだろう。昼間の馬車の中、微睡む少女に愛おしげに唇を寄せたヴィオラン
トは、ラウルにとつても驚きであった。

「謝るならアマリーに。それから——ありがとう、もね」

菫はヴィオラントに抱かれたままラウルを睨み、かたわらに寄り添っていたアマリアスと手を繋
いだ。国王の子を宿したばかりの王妃は、その輝かんばかりの美貌を綻ばせ、少女の柔らかな頬に

親愛のキスを贈る。

それには少々妬けたので、ラウルは立ち上がったつかつかと妻に近づくと、葦と繋いでいない方の手を取り彼女の前に片膝をついた。

その瞬間、大広間はしんと静まり、ざっと音が聞こえそうな勢いで一気に視線がラウルに集まった。コンラートの人々はざわざわと歓談しながらも、さりげなく国王夫妻と客人の様子をうかがっていたらしい。

そんな状況に怯むことなく、ラウルは熱い視線を愛する妻に捧げつつ、言葉を紡いだ。

「君の可愛い義姉上に叱られてようやく気づいた僕は、本当に駄目な夫だね。ごめんよ、アマリアス」
恭しく取った王妃の白い手に、コンラート国王はひとつ口付けを落とした。

葦の小さな足に蹴られた向こう脛の痛みにも悶えつつ、ラウルは彼女とアマリアスの会話を聞いていたのだ。そして、子供を授かっていなかったことが、自分が思う以上にアマリアスを苦しませていたことに気づき、愕然とした。

自分達に子供ができなくても、三人いる兄達の誰か一人くらいは子をつくるだろうし、他にも王族には優秀な跡取りになれる者はたくさんいるからかまわないと、樂觀視していた己の愚かさをラウルは恥じた。

「君が側にいてくれるだけで、僕は幸せなんだ。だから、何が何でも子供が欲しいとは思わなかったのは本当だよ？ でも、アマリアスの子供……」

ところがそこまで口にして、ラウルの頭の中で「アマリアスの子供」のイメージが急激に膨れ上

がる。

「そりゃあ、めちゃくちゃ可愛いだろうなっ！ 男かな女かな？ アマリアスそっくりの女の子だったら、僕お嫁に出す時絶対泣いちゃうよな……っ!!」

「落ち着いてよ、バカキング」

突如一人妄想に浸って興奮し始めたラウルを、葦がここにいるすべての人々を代表して、現実に戻してやった。

「あー、ええっと……ごほん、失礼」

ラウルは周囲の冷めた視線を受けてばつが悪そうに咳払いをし、再び妻の手を恭しく握り直した。「ねえ、アマリアス。まさか、子ができない原因を君に押しつけた馬鹿がいたのだろうか？」

ラウルの口調は相変わらず柔らかいが、コンラート王家の象徴とも言える薄緑色の瞳には凄みがあり、今は彼が確かにこの国の王であると頷かせるだけの威厳があった。

「だとしたら、僕はそいつを絶対に許さないし、そいつに気づけなかった自分も許せない」

彼を玉座に導いた運命の女神ともいえるアマリアスを、どんな形であろうと傷つけたのであれば、彼は王としても夫としてもその者を決して許しはしないだろう。

アマリアスは、そんな静かな怒りに滾る薄緑色の瞳を見下ろし、くすりと笑って肩を竦めた。

そして、ラウルに握られていた手をするりと抜き取り、突然彼の高い鼻を親指と人さし指で摘んだ。

「ぶむっ」

「そんな意地悪な方……いませんでしたわよ。皆ただ純粹に、あなたとわたくしの子を心待ちにし

てくれていましたわ。それにいつまで経っても応えられない自分が、ただ不甲斐なかつただけです」
本当は、これまでラウルに愛人を持つよう勧める者もいたのだ。それに気づいたアマリアスが深く傷ついたのも事実だ。

しかし、ラウルが決して首を縦に振らなかったことも、彼女の前でその話題を許さなかったことも知っている。

疑う余地も与えない真つ直ぐなラウルの愛が、いつもアマリアスを支えてくれていた。

「それに、わたくし授かりましたわ。まだ本当に、わたくしのお腹の中に赤子がいるなんて実感はないですけれど」

そう言つてアマリアスは花のように微笑み、夫の鼻を摘んでいた手を解いて己のなだらかな腹を撫でた。

それから、繋いだままだった葦の手を引き寄せ、そつとキスをした。

「ねえ、不思議ねラウル。長い間音沙汰なかつたつれない我が子。スマレが来るのに合わせたのかしらね?」

「——そうかつ！ お嬢ちゃんのおかげか!! じゃあ今後、子授け姫として崇め奉り、各地に宮を……」

「そんな御利益ないし。詐欺で訴えられるのイヤだから、やめて。迷惑」

コンラート国王夫婦の妄想に組み込まれそうになるのを、葦は心底迷惑そうな顔で辞退した。

「そんなことより、何か言い忘れてるでしょ」

そうして彼女は、ラウルに向かってつんと顎をしゃくる。

人形のように愛らしいビジュアルでの横柄な態度は、ある意味とても迫力がある。

葦の指摘にはつとなつたラウルは立ち上がり、彼女よりようやく譲ってもらつた妻の手を両方握りしめると、穏やかに見上げてくる美しい碧眼を、真剣な眼差しで真つ直ぐ見つめ返した。

「僕の子を宿してくれて、ありがとう。君の兄上とその婚約者と、ここにいるすべての者に証人になつてもらおう。僕は王として夫として、コンラートを末永く平和で栄えた国とすることを、今ここで君と僕らの子に誓うよ」

「父、としても、ですわね?」

にっこりと蕩けるような微笑みがくれた「父」という慣れない言葉に、ラウルは一瞬きよとんとした。

そして一気に相好を崩したと思つたら、感極まった様子でがばりとアマリアスを抱き締め、その唇にキスをした。

その瞬間、大広間がわつと喜びの声に沸いた。

コンラートの人々は、国王夫婦の仲睦まじさと約束された祖国の繁栄を祝つて、それぞれにグラスを掲げ、口々に乾杯を唱えた。

「あれ? もしもし、ヴィー?」

アマリアスの幸せそうな顔を見て、「うむうむ」と満足そうに頷いていた葦だったが、一方ヴィー

オラントの機嫌がそれほど思わしくないことに気づいて、彼に向き直った。

「お兄ちゃまったら、妬やいてるの？」

「妬く……とは違うが。アマリアスをラウルに嫁にやったのは、私だしな。何とか少々……複雑な気分だ」

本人の言葉通り、本当に複雑そうな様子で仲睦むつまじい妹夫婦を見ていたヴィオラントは、宴に喧けん噪そうが戻ってくるのと彼らの側を離れた。

類似たぐ稀まれなる美貌のヴィオラントと珍しい髪色の葦のペアは、当然パーティに参加したコンラートの人々の注目を浴びることになった。

ヴィオラントは、自分に集中する貴婦人達の熱い視線を無視するのは得意だが、愛らしく着飾った葦に向けられる男達の視線には耐えかねたらしい。適当に酒と料理を摘つまむと、懐妊かひにんしたアマリアスへの祝いの言葉もそこに、葦を半ば攫さらうように抱き上げて、早々に宛あてがわれた客室に引き上げてしまった。

客室に戻ると、そこにはレイスウエイク家の女官長マーサが控えていた。

彼女の手により風呂は温かい湯で満たされ、夜具の用意も全て整えられていた。

ヴィオラントはマーサをねぎらうと、後は自分でやるからかまわないと告げ、彼女にも今日は仕事を終わりにして大広間の宴を楽しむように勧めた。

主人達の雰囲気を感じたマーサが、邪魔をしないようにと、窓辺に置かれていたちびセバスせむを伴って部屋を出ていくと、ヴィオラントはお茶の用意が整えられたテーブルの前のソファに腰を下ろ

し、軽くため息をついた。

当然のようにそのまま膝の上に座らされた葦は、手を伸ばして紅茶を二つのカップに注ぎ、片方を座布団代わりになっている男に差し出した。

「ヴィーってば、目の前でいちゃつく娘を見せつけられた、お父さんの気分？」

「……まあ、そんな感じだろうか」

「寂しいの？」

「……うむ……どうだろう」

先代代のグラディアアトリア皇帝とその子供達の間には、あまり親子らしい接触はなかった。

早い段階から皇太子の地位にいたヴィオラントだけは、彼と接する機会が多かったが、アマリアス達弟妹にとっては長兄のヴィオラントが父親代わりであった。実際に彼らを育てたのは、乳母であったり教育係であったりしたが、頼もしい兄の存在は彼らにとって心強かったに違いない。

また、彼らを心の支えとして激動の時代を乗り切ったヴィオラントにとって、アマリアス達はいつまで経っても可愛い子供達なのだろう。

深々とため息をついて、そっと紅茶のカップに口をつける彼のそんな姿は、またしても葦に離れてしまった実兄を思い起こさせた。

元の世界に戻れるのか戻れないのか、よく分からない。

その相談をするために会うはずだったコンラート国王の兄ルータスは、結局この日、王城にやってこなかった。明日、彼の屋敷を訪ねようとヴィオラントは言ってくれたが、彼に会ったからとい

って問題が解決するという保証はない。

いつも一番身近であった兄の存在がまったく感じられない今、葦は彼のがとても恋しくなった。自分は本当は、こんなにも兄が大好きだったのだと思い知らされ、今まで素直に甘えられなかったことをとでも後悔した。

一方で、自分が婚約したんだよと告げれば、兄はどうするのだろうかと思えた。

スキンシップ過多気味のヴィオラントの様子を見て、兄も今の彼のような複雑な思いをするのだろうか。

そう考えると何だかくすぐったく、憂いを浮かべたヴィオラントの横顔がとても愛しく思えた。

葦は紅茶のカップをテーブルの上のソーサーに戻し、ヴィオラントに向き直った。

「ヴィー」

「うん？」

「慰めてほしい？」

葦がそう問うと、現金なことに、寂しい父親の雰囲気を醸し出していたヴィオラントの憂い顔が瞬時に情欲を隠さぬ男の顔に変化した。

「ああ、ぜひとも」

そして、自分も飲みかけの紅茶のカップをテーブルに戻すと、自由になった両腕で彼女を囲い込んでしまう。

「うんうん。とりあえず、お風呂入ってからね」

「わかった」

「それまで、何にもしちゃだめだからね」

「……」

「ヴィーさん、お返事は？」

「……わかった」

何とかヴィオラントを顔かせた葦だったが、結局その後はまったく寛げない入浴タイムとなった。今さらであるが、まだ婚約しただけの関係でありながら、男女が一緒に客室というのをおかしい。こんな大きなコンラート城に、客室が足りないはずもない。

そもそも、何ゆえ周りはそれを指摘しないのだろうか。

ただ一人カーティスだけは、ヴィオラントと葦の相部屋を知ってぎよっと目を剥いていた。

先ほどの大広間でも、コンラートの騎士達と歓談していた彼は、当然のように義妹を連れて同じ部屋に引き上げていくヴィオラントの背中を、ひどく複雑な顔で見送っていたのだ。

「あのさあ、ヴィー。一応私にだって、恥じらいつてもんがあるんだけど……」

「そなたの身体に、恥じるべきところなど一つもない」

まずは、ドレスの背中のリボンに手が届かないからと、それをヴィオラントに解かせたのがまずかった。

ではついでに全部任せなさいとばかりに、彼にぼいぼいと衣服をすべて脱がされて、あれよあれよと言う間に葦は生まれたままの姿に剥かれてしまった。